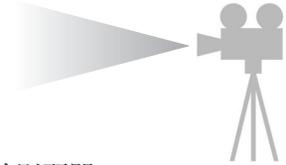




映画とその時代 ⑩



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 桜井 修

この夏、遙かロンドンから、日本の映画ファンに朗報が届いた。世界中の高名な映画監督数百名に映画史上のベストテンをアンケートし、その1位に日本の小津安二郎作品『東京物語』が選出されたという。

このイベントは英国の公的権威をもつ映画評論誌が10年ごとに実施するもので、2位以下にはスタンリー・キューブリックの『2001年宇宙の旅』、オーソン・ウェルズの『市民ケーン』、ヴィットリオ・デ・シーカの『自転車泥棒』など、衆目の納得する作品が続いている。

どの国でも一流とされる監督たちは、それぞれ自らの美意識にこだわり、容易に妥協しない感性の持ち主に違いない。それだけにこのメンバーの推奨による金メダルは、泉下の小津監督にとってこの上ないレクイエムだろう。

それにしても昭和28年の遠い昔に作られた『東京物語』が、その芸術的香気を失うことなく、今なお世界中の優れた感性のなかに息づいているのは何故だろう。

映画というメディアは、ひとつの時代を流れる(空気)そのものを映し出す鏡だ。いわば(旬)のテイストにその生命がある。それだけに、世相が変転すればたちまちに色が褪せ、その大半は驚くほど早く忘れ去られてしまう。

ところが、この選出リストの上位を占める数本は、数十年の風霜を潜りながら、その鮮度が全く落ちていない。稀少なこの作品群に通底するものは、何よりもそれぞれの監督の並外れた個性と、それまでの常識を覆す全く独創的な映画作りの手法だろう。

(小津調)と呼ばれるイメージの特異さはひろく世界に知られている。あまりにも端正に過ぎる構図。不自然なカメラ位置。違和感を覚える俳優の目線。突然に入り込む余白の沈黙。しかし次第に観客は、そんな戸惑いを呼ぶカットが、すべて周到に計算されたパーツであることに気付き、抜き差しならない形で積み重ねられてゆくプロセスに酔い、やがてまるでジグソーパズルのような寸分の隙もない細密画の世界に誘い込まれる。

(俺は豆腐屋だから豆腐しか作れない。)これは小津監督が遺した警拔な表現だが、たしかに彼は、親と子の避けがたい別離と家族という絆のゆるやかな崩壊をひたすら見据え、同じテーマの傑作群を生んだ。『東京物語』はそのなかでも最高の結晶だろう。

親子、そして家族。それは民族や文化の壁を越えて、人の世の根源を問う、もっとも普遍的なテーマだ。小津監督の受賞は蓋し当然と言う外はない。—————